

お月さまいくつ

北原白秋

青空文庫

お月さまつきまいくつ。

じふさんじふさんなななな
十三七じふさんつ。

まだ年としや若わかいな。

あの子こを産うんで、

この子こを産うんで、

だあれだに抱だかしよ。

お方まんに抱だかしよ。

お方まんは何処どこへ往いた。

油あぶら買かひに茶ちや買かひに。

油あぶら屋やの縁えんで、

氷こほりが張はつて、

油あぶら一升しやうこぼした。

その油あぶらどうした。

太郎たろうどんの犬いぬと

次郎じろうどんの犬いぬと、

みんな嘗なめてしまった。

その犬いぬどうした。

太鼓たいこに張はつて、

あつちの方ほうでもどんどんどん。

こつちの方ほうでもどんどんどん。
(東京)

この「お月さまいくつ」の謡うたは、みなさんがよく御存じです。私たちも子供の時は、よく紅あかい円まるいお月様を拝みに出ては、いつも手拍子をうっては歌つたものでした。この童謡は国くに国くにで色いろ色いろと歌ひくづされてゐます。然しかし、みんなあの紅あかい円まるいつやつやしたお月様を、若い綺麗きれな小母をばさまだと思つてゐます。まったくさう思へますものね。

お月つきさんほつち。

あなたはいくつ。

じふさんなな
十三七つ。

そりやまだ若いに。

紅鉄漿つけて、

お嫁入りなされ。(伊勢)

ののさまどつち。

いばらのかげで、

ねんねを抱いて、

花つんでござれ。(越後)

あとさんいくつ。

じふさんひと
十三一つ。

まだ年若いの。

今度京へ上つて、

藁の袴織つて着しよ。(紀伊)

お月^{つき}さんいくつ。

じふさん^{なな}なな
十三七^つ。

まだ年^{とし}は若^{わか}い。

なな^{をり}き
七折^せ着^きせて、

おんどきよへのぼしよ。

おんどきよの道^{みち}で、

尾^をのない鳥^{とり}と、

尾^をのある鳥^{とり}と、

けいつちいや、あら、

きいようようと鳴^ないたとさ。

「おんどきよへ」とは、

(伊勢)

「今^{こん}度^{んど}京^{きやう}へ」といふのがなまつたのです。

お月^{つき}さまいくつ。

じふさん^{なな}なな
十三七^つ。

そりやちと若^{わか}いに。

お御堂の水を、

どうぞと汲くもに。(美濃)

お月さま。お年はいくつ。

十三七つ。

お若いことや。

お馬に乗のつて、

ジャンコジャンコとおいで。(尾張)

かういふ風ふうに、「そりやまだ若いわかに。」と、みんな歌つてゐるから面白いのです。京へ上のぼつたり、紅べにかねつけたり、お嫁入りしたり、赤ん坊を生んだりしてゐます。お馬のジャンコジャンコもおもしろいでせう。それにまた、「そりやまだ若いわか。若船わかぶねに乗のつて、唐からまで渡わたれ。」(紀伊)といふのもあります。それから少し變つてゐるのに、一寸ちよつと西洋せいやうの童謡見たやうなのがあります。それは珍らしいものです。

お月様つきさまいくつ。

じふさんなな
十三七つ。

まだ年としは若いわかど。

お月様つきさまの後あとへ、

小ちいぢやつをつけ和尚しやうが、

滑すべり橋ばしををかけて、

お月様つきさま拜まをがむとて、

ずるずるすべつた。(下総)

これは、空のけしきが其のままに歌はれてゐます。小さい和尚さんは白い星うすか薄うすい霧のやうな星の雲かでせう。滑すべり橋ばしもさうした雲のながれでせう。天の川のやうな。ずるずる滑るところがをかしいではありませんか。

それから、その綺麗きれいな若いお月様の小母さまに、みんながお飯まんまを見せびらかしたり、またいろんなものをせびつたりします。やはり子供の小母さまですから。

お月様。
つぎさま

観音堂下りて、
くわんのんだうお

飯上がれ。
まんま

飯はいやいや。
まんま

あんもなら三つくりよ。
(信濃)

お月様。お月様。
つぎさま つぎさま

赤い飯いやいや。
あかまんま

白い飯いやいや。
しろまんま

銭形金形ついた
ぜにがたかねがた

お守りくんさんしよ。
まも
(岩代)

あとさん。なんまいだ。

ぜぜ一文おくれ。
もん

油買つて進じよ。
あぶか
(肥前)

どうでやさん。どうでやさん。

赤い^{あか}衣服^{べべくだ}下んせ。

白い^{しろ}衣服^{べべくだ}下んせ。

(陸中)

そのお月様は、紅^{あか}いのに桃色だと云つたとて、プリプリ怒つたのもあります。

お月^{つきさま}様 桃^{ももいろ}色。

誰^{だれ}が云^いつた。

海女^{あま}が云^いうた。

海女^{あま}の口^{くち}ひきさけ。

(尾張)

それから、

大事^{だいじ}なお月^{つき}さま、

雲くもめがかくす。

とても隠かくすなら、

金屏風きんびやうぶでかくせ。(東京)

といふのがありませう。ほんとに金屏風でなくては、あの若い小母さまには似合はないでせうね。いかにも昔のお江戸の子供が謡つたやうでせう。気象きしやうが大きくておほまかで、張はりがあつて、派出はでで。

「兎うさぎうさぎ」といふのも御存じでせうね。

兎うさぎ。うさぎ。

何なに見みて跳はねる。

十五夜じふごやお月つきさま

見みて跳はねる。ピョンく。

ほんとに、お月夜の兎のよろこびと云つたらありません。両耳を立てて、草の香の深い

中から、ピヨン／＼と跳ねて飛んで出る、あの白い綿のやうな兎さんもかはいいものです。それにしても、あのまアるいお月さまの中には、いつも兎が杵きねをもつて餅を搗ついてゐる筈でしたね。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆58 月」作品社

1987（昭和62）年8月25日第1刷発行

底本の親本：「北原白秋全集 第一六巻」岩波書店

1985（昭和60）年6月

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

お月さまいくつ

北原白秋

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>